



一、落語 お囃子 稲葉 千秋 学校代表 落語	一、落語 三遊亭 美ふじ	一、落語 春風亭 吉好	一、落語 仲入り (きゅうけい)	一、落語 鏡味 正二郎	一、落語 古今亭 今輔
------------------------------	-----------------	----------------	---------------------	----------------	----------------

 こ こん てい いま すけ 古今亭 今輔	 かが み せい じ ろう 鏡味 正二郎	 しゅんぶう てい よし こう 春風亭 吉好	 さん ゆう てい み 三遊亭 美ふじ
---	--	---	---

◎落語の始まり

落語の始まりは、室町時代末期から安土桃山時代にかけて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆」と呼ばれる人達が、面白おかしく話をし広まったことが起源であるとされています。その中の一人安楽庵策伝という浄土宗の僧侶は、豊臣秀吉の前で滑稽なオチのつく「断」を披露して大変喜ばれました。後に、京都所司代の板倉重宗に頼まれて、千余りにものぼる小断を「醒睡笑」という書物に記しています。

江戸時代に入り有料で断を聞かせる人物が登場します。

大阪では「米澤彦八」、京都では「露の五郎兵衛」、江戸では「鹿野武左衛門」などが活躍しました。

◎落語のスタイル

扇子と手ぬぐいを持った一人の演者が、座布団の上に座って滑稽な話をします。断家は声色や仕草を交えて、老若男女全ての登場人物を演じ分けます。つまり、話芸だけでお客様は自由に想像力を膨らませ、頭の中に絵を描き出すことにより極上の笑いをかもし出します。

◎落語の形

■上下(かみじも)

一人の断家が複数の登場人物を演じ分けるため、顔を左右に向けて話します。身分の違いや、家の内と外で会話する場合、目下の者や外から話しかける時は、上手(客席から見えて右)を向いて話すことなどが決められています。

■持ち道具

扇子と手ぬぐいの二つを持ち、この小道具をいろいろな形に使いながら、落語の世界を創っていきます。扇子はお箸・筆・刀・キセルなどに。手ぬぐいは財布・煙草入れ・巾着などに見立てて使われます。

■オチ(さげ)

江戸時代落語は「落とし断」と呼ばれていました。主なものとして、地口オチ・とたんオチ・仕草オチ・考えオチ・間抜けオチなどがあります。

■マクラ

マクラとは断の本題に入る前にしゃべる、ちよっとした世間話や小咄のことです。事前に演題を発表しない寄席では、断家はマクラでお客様の反応を探ってどんな演目にするか選びます。

◎寄席のひろひろ

寄席というのは人を集めて芸能を催す「人寄せ場」の略です。

今から約200年程前に常設寄席(定席)が始まりました。

江戸時代には200軒あった寄席ですが、現在は都内に4軒残っています。

寄席では落語と色物と呼ばれる『見て楽しめる』ものが次々と登場します。

寄席の一日は太鼓で始まります。

開演の30分前に「一番太鼓」が鳴ります。(トンドンドンドコイ、ドンドントンドコイと打ちます。これを合図に開場です。次に、開演直前には「二番太鼓」が鳴ります。(オタフクコイ、オタフクコイと打ちます。着到(ちゃくと)とも呼ばれる太鼓で間もなく開演です。出囃子と共に開口一番、前座さんの登場です。その後も仲入り(休憩)の太鼓、トリ(一番最後に出る方)が終わると追い出し太鼓を打ちます。別名「薄情太鼓」とも呼ばれ(デテケ、デテケ、デテケ)と打ち、これで寄席の一日が終わります。この太鼓、実は断家(前座)が叩いています。

◎断家(前座)の修行

断家には《前座》↓《二ツ目》↓《真打》という段階があります。厳しい修行を経て、真打になるまでには15年くらいかかります。前座の修行は大変です。落語を覚えるのはもちろんのこと、太鼓も覚えなければなりません。その他、先輩方にお茶を出したり(個々の人の好みを覚えなければなりません)、着物をたんだりと大変忙しく、覚えることがたくさんあります。前座修行を4年間努め晴れて二ツ目昇進です。これからは、自分の芸をみがかなければなりません。

断家はいつまでも芸の勉強をしなければならないのです。

みなさん初めまして、ぼくはバク助です。

落語芸術協会のマスコットキャラクターとして生まれました。

どうしてぼくがマスコットになったかというと、落語をもっと子供みんなにも聞いてもらいたいと思ったからなんだ。

「落語」ってちょっとむずかしそうな感じがするよね。

話しかたなんかも今とは少しちがうし、名前なんか聞いたこともない道具がいっぱい出てくるし、はじめてだとわからないことだらけだよ。

そんなむずかしいことをぼくがわかりやすくおしえてあげるよ。

でも、ぼくも生まれたばかりだからぜんぶ知ってるわけじゃないんだ。

けどこれから落語のことをいっぱい勉強していくからだいじょうぶ。

だからみんなもぼくのことを応援してね。





協藝

〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-12-30
芸能花伝舎2階
公益社団法人 落語芸術協会
TEL.03-5909-3080 FAX.03-5909-3082
www.geikyo.com
info@geikyo.com

●公益社団法人 落語芸術協会

公益社団法人落語芸術協会は、寄席芸能を広く普及し後生へ伝える為、昭和5年10月に日本芸術協会として設立。昭和52年12月に法人許可され「社団法人落語芸術協会」と改称。

平成23年4月に「公益社団法人落語芸術協会」と改称。

断家と色物(曲芸・漫才・奇術・紙切り・俗曲等)お囃子を入れ、会員数250名令和4年現在の大所帯である。

当協会は寄席芸能の責任団体として、東京の寄席の出演を始め全国各地の会館や学校で主催される、寄席(落語会)の企画制作を行い、落語の普及に尽力している。

また、寄席以外に継承にも力を入れ、年間約90ステージに及ぶ若手による落語会を催している。

現在、会長の春風亭昇太のもとに演芸関係のリーダー格として位置づけられている。

日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。



お囃子 井手窪 泉

学校代表 落語

桂 伸びん

桂 竹千代

仲入り (きゅうけい)

小 小 助

柳 亭

芝 樂

桂 伸びん

桂 竹千代

小 助・小 時

柳 亭 芝 樂

◎落語の始まり

落語の始まりは、室町時代末期から安土桃山時代に掛けて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆」と呼ばれる人達が、面白おかしく話をし広まったことが起源であるとされています。その中の一人安楽庵策伝という浄土宗の僧侶は、豊臣秀吉の前で滑稽なオチのつく「断」を披露して大変喜ばれました。後に、京都所司代の板倉重宗に頼まれて、千余りにものぼる小断を「醒睡笑」という書物に記しています。

江戸時代に入り有料で断を聞かせる人物が登場します。

大阪では「米澤彦八」、京都では「露の五郎兵衛」、江戸では「鹿野武左衛門」などが活躍しました。

◎落語のスタイル

扇子と手ぬぐいを持った一人の演者が、座布団の上に座って滑稽な話をします。断家は声色や仕草を交えて、老若男女全ての登場人物を演じ分けます。つまり、話芸だけでお客様は自由に想像力を膨らませ、頭の中に絵を描き出すことにより極上の笑いをかもし出します。

◎落語の形

■上下(かみじも)■

一人の断家が複数の登場人物を演じ分けるため、顔を左右に向けて話します。身分の違いや、家の内と外で会話する場合、目下の者や外から話しかける時は、上手(客席から見えて右)を向いて話すことなどが決められています。

■持ち道具

扇子と手ぬぐいの二つを持ち、この小道具をいろいろな形に使いながら、落語の世界を創っていきます。扇子はお箸・筆・刀・キセルなどに。手ぬぐいは財布・煙草入れ・巾着などに見立てて使われます。

■オチ(さげ)

江戸時代落語は「落とし断」と呼ばれていました。主なものとして、地口オチ・とたんオチ・仕草オチ・考えオチ・間抜けオチなどがあります。

■マクラ

マクラとは断の本題に入る前にしゃべる、ちよっとした世間話や小咄のことです。事前に演題を発表しない寄席では、断家はマクラでお客様の反応を探ってどんな演目にするか選びます。

◎寄席のひろひろ

寄席というのは人を集めて芸能を催す「人寄せ場」の略です。

今から約2000年前に常設寄席(定席)が始まりました。

江戸時代には200軒あった寄席ですが、現在は都内に4軒残っています。

寄席では落語と色物と呼ばれる『見て楽しめる』ものが次々と登場します。

寄席の一日は太鼓で始まります。

開演の30分前に「一番太鼓」が鳴ります。(トンドンドンドコイ、ドンドントンドコイと打ちます。これを合図に開場です。次に、開演直前には「二番太鼓」が鳴ります。(オタフクコイ、オタフクコイと打ちます。着到(ちゃくと)とも呼ばれる太鼓で間もなく開演です。出囃子と共に開口一番、前座さんの登場です。その後も仲入り(休憩)の太鼓、トリ(一番最後に出る方)が終わると追い出し太鼓を打ちます。別名「薄情太鼓」とも呼ばれ(デテケ、デテケ、デテケ)と打ち、これで寄席の一日が終わります。この太鼓、実は断家(前座)が叩いています。

◎断家(前座)の修行

断家には「前座」↓「二ツ目」↓「真打」という段階があります。厳しい修行を経て、真打になるまでには15年くらいかかります。前座の修行は大変です。落語を覚えるのはもちろんのこと、太鼓も覚えなければなりません。その他、先輩方にお茶を出したり(個々の人の好みを覚えなければなりません)、着物をたんだりと大変忙しく、覚えることがたくさんあります。前座修行を4年間努め晴れて二ツ目昇進です。これからは、自分の芸をみがかなければなりません。

断家はいつまでも芸の勉強をしなければならないのです。

みなさん初めまして、ぼくはバク助です。

落語芸術協会のマスコットキャラクターとして生まれました。

どうしてぼくがマスコットになったかというと、落語をもっと子供のみんなにも聞いてもらいたいと思ったからなんだ。

「落語」ってちょっとむずかしそうな感じがするよね。

話しかたなんかも今とは少しちがうし、名前なんか聞いたこともない道具がいっぱい出てくるし、はじめてだとわからないことだらけだよ。

そんなむずかしいことをぼくがわかりやすくおしえてあげるよ。

でも、ぼくも生まれたばかりだからぜんぶ知ってるわけじゃないんだ。

けどこれから落語のことをいっぱい勉強していくからだいじょうぶ。

だからみんなもぼくのことを応援してね。



〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-12-30
芸能花伝舎2階
公益社団法人 落語芸術協会
TEL.03-5909-3080 FAX.03-5909-3082
www.geikyo.com
info@geikyo.com

●公益社団法人 落語芸術協会

公益社団法人落語芸術協会は、寄席芸能を広く普及し後生へ伝える為、昭和5年10月に日本芸術協会として設立。昭和52年12月に法人許可され「社団法人落語芸術協会」と改称。

平成23年4月に「公益社団法人落語芸術協会」と改称。

断家と色物(曲芸・漫才・奇術・紙切り・俗曲等)お囃子を入れ、会員数250名令和4年現在の大所帯である。

当協会は寄席芸能の責任団体として、東京の寄席の出演を始め全国各地の会館や学校で主催される、寄席(落語会)の企画制作を行い、落語の普及に尽力している。

また、寄席以外に継承にも力を入れ、年間約90ステージに及ぶ若手による落語会を催している。

現在、会長の春風亭昇太のもとに演芸関係のリーダー格として位置づけられている。

演 芸 公 演

An illustration of four children in traditional Japanese clothing. From left to right: a boy in a striped kimono playing a flute, a boy in a dark kimono playing a drum, a girl in a checkered kimono playing a shamisen, and a boy in a dark kimono playing a large drum. The background is a light gray checkered pattern.

文化庁



日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。



一、落語 お囃子 木本 恵子 学校代表 落語	一、落語 桂 志 福	一、落語 雷 門 助	一、落語 仲入り (きゅうけい)	一、落語 鏡 味 千 代	一、落語 春風亭 愛 橋
------------------------------	---------------	---------------	---------------------	-----------------	-----------------

 しゅんぶう てい あいきょう 春風亭 愛橋	 かが み み ち よ 鏡味 味千代	 かみなりもん おと すけ 雷門 音助	 かつら いち ふく 桂 志福
------------------------------	--------------------------	---------------------------	-----------------------

◎落語の始まり

落語の始まりは、室町時代末期から安土桃山時代に掛けて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆」と呼ばれる人達が、面白おかしく話をし広まったことが起源であるとされています。その中の一人安楽庵策伝という浄土宗の僧侶は、豊臣秀吉の前で滑稽なオチのつく「断」を披露して大変喜ばれました。後に、京都所司代の板倉重宗に頼まれて、千余りにものぼる小断を「醒睡笑」という書物に記しています。

江戸時代に入り有料で断を聞かせる人物が登場します。

大阪では「米澤彦八」、京都では「露の五郎兵衛」、江戸では「鹿野武左衛門」などが活躍しました。

◎落語のスタイル

扇子と手ぬぐいを持った一人の演者が、座布団の上に座って滑稽な話をします。断家は声色や仕草を交えて、老若男女全ての登場人物を演じ分けます。つまり、話芸だけでお客様は自由に想像力を膨らませ、頭の中に絵を描き出すことにより極上の笑いをかもし出します。

◎落語の形

■上下(かみじも)

一人の断家が複数の登場人物を演じ分けるため、顔を左右に向けて話します。身分の違いや、家の内と外で会話する場合、目下の者や外から話しかける時は、上手(お客様から見えて右)を向いて話すことなどが決められています。

■持ち道具

扇子と手ぬぐいの二つを持ち、この小道具をいろいろな形に使いながら、落語の世界を創っていきます。扇子はお箸・筆・刀・キセルなどに。手ぬぐいは財布・煙草入れ・巾着などに見立てて使われます。

■オチ(さげ)

江戸時代落語は「落とし断」と呼ばれていました。主なものとして、地口オチ・とたんオチ・仕草オチ・考えオチ・間抜けオチなどがあります。

■マクラ

マクラとは断の本題に入る前にしゃべる、ちよっとした世間話や小咄のことです。事前に演題を発表しない寄席では、断家はマクラでお客様の反応を探ってどんな演目にするか選びます。

◎寄席のひろひろ

寄席というのは人を集めて芸能を催す「人寄せ場」の略です。

今から約200年程前に常設寄席(定席)が始まりました。

江戸時代には200軒あった寄席ですが、現在は都内に4軒残っています。

寄席では落語と色物と呼ばれる『見て楽しめる』ものが次々と登場します。

寄席の一日は太鼓で始まります。

開演の30分前に「一番太鼓」が鳴ります。(トンドンドンドコイ、ドンドントンドコイと打ちます。これを合図に開場です。次に、開演直前には「二番太鼓」が鳴ります。(オタフクコイ、オタフクコイと打ちます。着到(ちゃくと)うとも呼ばれる太鼓で間もなく開演です。出囃子と共に開口一番、前座さんの登場です。その後も仲入り(休憩)の太鼓、トリ(一番最後に出る方)が終わると追い出し太鼓を打ちます。別名「薄情太鼓」とも呼ばれ(デテケ、デテケ、デテケ)と打ち、これで寄席の一日が終わります。この太鼓、実は断家(前座)が叩いています。

◎断家(前座)の修行

断家には《前座》↓《二ツ目》↓《真打》という段階があります。厳しい修行を経て、真打になるまでには15年くらいかかります。前座の修行は大変です。落語を覚えるのはもちろんのこと、太鼓も覚えなければなりません。その他、先輩方にお茶を出したり(個々の人の好みを覚えなければなりません)、着物をたんだりと大変忙しく、覚えることがたくさんあります。前座修行を4年間努め晴れて二ツ目昇進です。これからは、自分の芸をみがかなければなりません。

断家はいつまでも芸の勉強をしなければならないのです。

みなさん初めまして、ぼくはバク助です。

落語芸術協会のマスコットキャラクターとして生まれました。

どうしてぼくがマスコットになったかというと、落語をもっと子供のみんなにも聞いてもらいたいと思ったからなんだ。

「落語」ってちょっとむずかしそうな感じがするよね。

話しかたなんかも今とは少しちがうし、名前なんか聞いたこともない道具がいっぱい出てくるし、はじめてだとわからないことだらけだよ。

そんなむずかしいことをぼくがわかりやすくおしえてあげるよ。

でも、ぼくも生まれたばかりだからぜんぶ知ってるわけじゃないんだ。

けどこれから落語のことをいっぱい勉強していくからだいじょうぶ。

だからみんなもぼくのことを応援してね。

〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-12-30
芸能花伝舎2階
公益社団法人 落語芸術協会
TEL.03-5909-3080 FAX.03-5909-3082
www.geikyo.com
info@geikyo.com

●公益社団法人 落語芸術協会

公益社団法人落語芸術協会は、寄席芸能を広く普及し後生へ伝える為昭和5年10月に日本芸術協会として設立。昭和52年12月に法人許可され「社団法人落語芸術協会」と改称。

平成23年4月に「公益社団法人落語芸術協会」と改称。

断家と色物(曲芸・漫才・奇術・紙切り・俗曲等)お囃子を入れ、会員数250名令和4年現在の大所帯である。

当協会は寄席芸能の責任団体として、東京の寄席の出演を始め全国各地の会館や学校で主催される、寄席(落語会)の企画制作を行い、落語の普及に尽力している。

また、寄席以外に継承にも力を入れ、年間約90ステージに及ぶ若手による落語会を催している。

現在、会長の春風亭昇太のもとに演芸関係のリーダー格として位置づけられている。